ポロのこと

丸尾壽郎

今年の夏はとりわけ暑い夏で、一日中、Tシャツとラフな薄地の綿ズボンで過ごしていた。散歩、買いもの、古本探し、郵便局、近間の用はその身なりで出かけて済ませてくるが、妻はそれが気にいらない。そういうぶざまな格好で近所をウロウロするのは止めてほしい、せめてシャツだけでも着替えて出て行ってと、うるさく言うが、こっちもつい面倒で、そのまゝ出かけていた。業を煮やしたらしい妻がとうとう新しくポロシャツを買ってきた。左胸に、馬上で打球棒を振り上げている黒い小さな刺繍がある。イヤだなと思ったが、ポロシャツにポロのマークなら傘やワニのよりはましだろうと妥協はしたが、後日、駅のホームで二三人の女子高校生の白い靴下に同じマークがついているのを見て、さすがに気恥しくなって、またTシャツに戻した。

この刺繍のポロのことから思い出したことがある。

『万葉集』巻六に「神亀四年正月、数の王子及び諸の臣の子等、春日野に集ひて打毬の楽をなす。その日忽ちに天陰り雨ふり雷電す。この時、宮中に侍従と侍衛と無し。勅して刑罰に行ひ、授刀寮に散禁せしめ、妄に道路に出づるを得ざらしむ」（九四八、九四九左注）とある「打毬」である。この打毬がポロで、発祥地の今のイランから東漸して中国を経て日本に到来したという。文献初出が皇極紀だという（『万葉集』2 日本古典文学全集）が、中大兄と鎌足が謀って蘇我入鹿を殺した（六四四年）記事には、「打毬」とあって蹴鞠のこと（『日本書紀』下 日本古典文学大系）だというから、別系統の球技だろう。

王家や諸臣の貴族の子弟らが、春の陽気に誘われて、「梅柳過ぐらく惜しみ」（九四九）、「友竝めて遊ばむものを　馬竝めて往かましし里を」（九四八）と、公務をよそに、「もののふの八十伴の雄」の授刀舎人らと、例年のように、佐保の地あたりでポロに興じ、若い血をおどらせていたわけである。（左注は、春日野と記すが、歌には佐保川、佐保の内とある。）

ポロを古態に近いかたちで見たのは、NHKのシルクロード二度目の放映で、「パミールを越えて」ではなかったかと思う。精悍な若者たちが草原で砂塵をまき上げ、馬をぶつけ合わんばかりの激しい打球技で、その壮絶さに痛快な興奮を覚えたのを思い出す。これは、田川邦子先生のご夫君がチーフディレクターとしてカラコルムの秘境、ギルギットで撮影されたものだが、万葉の貴公子たちの打毬もこうした騎乗の打球技ではなかったか。

『経国集』の嵯峨天皇「七言、早春観二打毬一」一首（巻十一）は、勃海使人たちの演技を見て詠じた詩で、「左擬んとすれば右承け、門に当つるを競う。分れ行る群踏、虬雷の声」とあり、これに奉和した滋野貞主の詩には、「鉤月は階蓂の側を度るが如く、点星は綵れる騎頭に睛るに似たり」とある。鉤月は

打球棒、点星は球であろう。これは騎乗のポロで徒歩のホッケー風の競技ではない。先の群踏虬雷の声は、騎馬の集団が大地を踏みとどろかせて球を追って右往左往する、その馬蹄のひびきを言ったものであろう。

これは、かなりの集団技で、『西宮記』には打毬者四十人列すとあるから、「数の王子及び諸臣の子等」もその程度の人数でポロを楽しんでいたに違いないと思う。そこへ天候の急変があったのだから、侍従や日夜宮中に宿衛の任を帯びる侍衛たちは泡をくったことだろう。続紀、同年二月丙辰条に「夜、雷雨大風」とあって、左注の記事と符節する。夜も荒天が続いたのであろう。昼間でも風雨雷電があれば、殿上人らもお見舞いにかけつける。天皇身辺の護衛の任にある授刀舎人らの侍衛が不在とあっては禁固刑も当然であろうが、この打毬散禁事件は、藤原氏に巧みに政治的に利用されたように思うのである。

すでに内舎人、兵衛があり、帯刀、帯杖して宮廷の警衛に当っていたのに、慶雲四年（七〇七）、阿閇皇女即位（元明天皇）直後、令外の官司として授刀舎人寮が設置されたのは、首皇太子（聖武天皇）の皇位継承の擁護と身辺護衛が目的だったと言われる。その初代帯刀寮長官は従五位下小野朝臣馬養（続紀、和銅元年三月廿三日）で、『年表日本歴史1』（筑摩書房）が初めから藤原房前が長官だったかに記すのは誤り。馬養は養老二年（七一八）新羅大使に任ぜられ帰国後は丹波国司だから、養老四年（七二〇）八月、藤原不比等の死で、舎人親王が知太政官事に、新田部親王が知五衛及授刀舎人事になり、長屋王が大納言となって皇親が政権と宮廷軍事力の兵権を掌握するまで、この間の授刀寮長官は誰か不明である。

『公卿補任』を見ると、房前が神亀三年（七二六）に授刀長官になっているが、養老六年以前説（笹山晴生氏）もある。これに従うと、授刀舎人寮という官制上の親衛隊の実質的な権力は房前が握りつづけていたことになる。

この侍従・侍衛ら打毬散禁事件が起きたとき授刀寮長官は房前であった。事件後、八日目には左大臣長屋王が百寮官人の勤務怠慢を戒め、諸司長官に官人の勤怠の査定を命じるとともに、七道に巡察使を派遣している。それから一ヶ月後、参議阿部広庭が、「衛府の人等は日夜闕庭に宿衛して、輒くその府を離れて、他所に散使ふことを得ざれ。」と、聖武天皇の勅を口宣している。衛府は五衛府と授刀舎人寮の総称で、官人の服務専念と禁衛軍事力の他用を禁じているのだが、この間、台閣でなにが議せられたかはともかく、この散禁事件が発端であることは確かであろう。房前は、この事件を千載一遇の好機として私に利用し、藤原氏の全政権掌握のための素地づくりとして、長屋王排除の構想を固め、そのためにも禁衛軍事力の中枢とその実権を握ることを計ったと思うのである。

翌、神亀五年（七二八）、授刀舎人寮は強化拡大されて、新しく中衛府が編成、設置されると、房前は授刀長官の地位は横すべりで、さらに強大な権力をもつ中衛大将となり、死ぬまでこれを手放さない（『公卿補任』）。新田部親王はこの時、大将軍という名誉称号が奉られて、明らかに皇親政治権力は後退させられている。

中衛府の設置が、長屋王排除のための軍事権力の集中強化であり、政権の掌握を藤原氏にとっていっそう確固不動のものとするための布石だったことは疑えない。しかしそのような構想は、この散禁事件が起きた直後になされたと見るべきであろう。

球技もまた「武事」。されば、それを政権抗争の深淵で巧みに利用して画策するのは、祖父譲りであったと言えようか。